連　載

ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 18
～一所懸命から一生懸命へ～

白田 一敏

アメリカ初体験 ―前編―

「アメリカへ一緒に行くかい？」

まさに、『棚からぼた餅』のような幸運。筆者の海外旅行初体験は、ドクターKのこのひと言がキッカケだった。

時は、働き始めて一カ月。『習うより慣れろ』という言葉の通り、筆者は農場現場に飛び込み、日々の仕事を精一杯こなしていた。『わからないことはニワトリに聞け』とは、ドクターKの教え。すべての真実はフィールドにある。机に座っていては答えを導き出せない。

しかしながら、単純に現場に行けばそれで済むわけでない。さまざまな要素、例えば技術、経験、思考、視点、発想ならびに信頼などを習得することが必要だ。そのためには、プロフェッショナルの仕事ぶりを肌で感じることが筆者の一番の血肉になる。したがって、機会を見つけてはドクターKに同行し、師匠の仕事ぶりを目に焼き付けることに没頭した。

いつものようにドクターKに同行し、農場からラボに向かう車中、唐突にアメリカ行きの話が始まった。

「アメリカへ一緒に行くかい？」

「アメリカって、海外の…ですか？」

ドクターKの仕事ぶりや物事に対する発想（着眼点）に、カルチャーショックの連続で頭の中が満タン。頭がオーバーヒート気味である筆者には、いきなりアメリカと言われても即座に理解できない。

「もちろん、そうだよ」

「何しに行くのですか？」

意味不明な質問をする筆者。

「もちろん、仕事（調査）だよ」

「アメリカで仕事があるのですか？」

依然として、頭の中が整理されない。

「観光旅行ではなく、仕事で海外に行くと言ったら格好良いゾ!!」

「……」

しばらく無言で考えた。確かに…格好が良い。この言葉に反応した。

少し冷静になってきた。冷静になると、少年時代の思い出が脳裏に浮かび上がった。

『スポーツカーのポルシェのマークによく似たマークがついた帽子、Tシャツを喜んで着ていたナ…』『その帽子やTシャツはヒヨコ屋さんがお土産みたいに持って来ていたナ…』『ヒヨコの親鳥は外国から輸入されるって言っていたナ…』

甘酸っぱい思い出とともに次々と脳裏にフラッシュバックした記憶により、養鶏業界は少なくともヒヨコを介して外国（特にアメリカやヨーロッパ）と連結していることを少し理解できた。

「海外か…」

さらに、潜在意識に封印されていた感情が甦る。

『大学生の頃、金持ちのボンボン息子が海外に行った話を聞いて、羨ましかったナ』『卒業旅行に海外に行った奴もいたナ』『海外留学した輩もいたよ』

羨望・嫉妬。

『金のない自分には縁のないことだ』と僻んでいた。しかし、ひょっとして、そのチャンスが筆者に転がってきたのかもしれない。

「ところで、いつからですか？」

「今月末からだ」

随分急な話である。出発日まで二週間ぐらいしかない。

「海外は未経験なので、パスポート持っていませんが…」

「申請すればよいだけだ。一週間もあれば、(パスポートを)取れるハズだ」

日々の仕事で経験するカルチャーショック。初めての体験の連続に足が地につかない。本当に自分がアメリカ出張に参加してもよいのか、半信半疑な気分だ。

落ち着いて考えれば、仕事で海外に行けることは、そう簡単にあることではない。まして、自分が本能的に選んだ仕事が、外国とつながっている可能性を考えるだけで心がワクワクする。物は考えようとはよく言ったものだ。

『凄いぜ！　養鶏業界』と何だか叫びたくなってきた。

こうなれば、答えは一つだ。

「ぜひ同行させてください」

こうして、アメリカへの海外出張を初体験することになった。

Too Heavy

ラボに戻ってから、慌ただしくパスポートを取得し、旅行の準備を始めた。しかし、そこは海外未経験である。何を準備すべきか検討がつかず、荷造りがはかどらない。困ったことにスーツケースも持ち合わせていない。

準備する物の多くは買えば解決するはずだが、頼みの初給料は乾ききった地面に水を注ぐように使い果たしてしまった。これでは雷鳥の調査のため本格的な山登りに挑戦した時とまるで同じで進歩がない（第12話参照）。全く情けない。結局、ドクターKから古いスーツケースをお借りすることになった。

アメリカへの出張は『遊び』ではなく、『仕事』で行くわけだ。調査に必要な資材もあわせて持参しなくてはならない。そこで、筆者はドクターKに準備すべき資材をお聞きした。

「アメリカで必要な資材は何でしょうか？」

「そうだね。現地（アメリカ）で卵質検査を実施したいのだよ」

「何を運びますか？」と筆者。

「まず、コンピューターかな。さすがにデスクトップは無理だからノートパソコン」

「次に、卵殻強度計とその土台であるステンレス台」

「それから、卵殻の厚さも測りたいね」

「卵重も量るから、秤も必要だね」

「それから…」と矢継ぎ早に答え、何か必要な器材を忘れていないかを考えるドクターK。

「まだあるのですか？」

スーツケースに入るか否か、少々不安になった。

「そうだ。卵黄色の基準指標を忘れないで」

この調子で指示された器材をスーツケースに全部詰め込んだ結果、四分の三のスペースが占拠された。スーツケースの重さは、四〇キロを超えていたかもしれない。両腕に全力を集中させて、やっと動かせる代物だ。重量の嵩んだ検査機材を運ぶことに一抹の不安を抱きつつも、気持ちはすでにアメリカに飛んでいた。

出発当日。待ち合わせ場所は成田空港。現地集合だ。筆者は新幹線と特急を乗り継いで集合地に向かった。

道中、東京駅で新幹線ホームから地下に降りる階段を前にして愕然とした。降車した場所が悪く、下りエスカレータが見当たらない。この重い荷物を持って降りることはかなりの重労働だ。必死で荷物を運んで一安心したところに、さらに階段が続く。

『重い…』

四〇キロを超える代物を階段下まで必死で運んだ後には、この言葉しか思い浮かばない。空港に着くまでに、筆者は汗だくになってしまった。

アメリカの何処の空港か記憶が定かでないが、X線の前にいたプロレスラーみたいな体格の白人検査官が筆者のスーツケースを持った時のことを鮮明に覚えている。

荷物を持ち上げたその瞬間、

「うっ!!」

彼は慌てて荷物を一旦降ろした。

「Too Heavy」

腰を抑えながら、思わず彼が洩らしたセリフだ。

白人検査官は、筆者の方を見てニヤリと笑い、『Heavy』とデカデカと

赤字で書かれたシールをスーツケースに貼り付けた。

どうやら、彼にとってもこの荷物は相当重かったようだ。

その様子を見て、『俺はコレ（荷物）をこの場所まで運んできたんだぜ！』と内心少し誇らしげに感じたのは、オスの闘争本能だろうか？

養鶏業は国際的!?

海外旅行と言えば真っ先に修学旅行のような団体旅行を想像していたが、実際は全く正反対であった。すなわち、視察メンバーはドクターKと筆者に加えて、全国で三指に入る採卵鶏用孵化場の三代目であるT社長ならびに薬品ディーラーのK本部長。総勢たった四名の小グループだ。

『えっ!! メンバーはたったこれだけ?』

『添乗員は来ないの?』

口にこそ出さなかったが、素朴な疑問を感じた。

旅行案内人として添乗員がいなければ、航空券の手配からホテル、食事の手配、移動手段まですべてを自ら準備しなくてはならない。もちろん一番大切なビジネスに関わる面会の約束や通訳も、である。しかし筆者の心配は見事に杞憂に終わった。

英語が堪能なドクターKとT社長は、種々の手配を手際よく処理した。その流れは非常にスムーズだ。おまけに、それぞれの場所で美味しいレストランも知っている。

『凄い…。格好良い!!』

彼らの英語力は相当なレベルであると即座に理解でき、感心した。その一方で、どのように英語を勉強したのだろうか、といった疑問も同時に浮んだ。

当時改めて知ったことだが、業界では会社のトップのみならず、将来の社長予備軍（ご子息!?）や幹部候補生を積極的に海外に出張させているという。養鶏業界の世界の情勢を把握しながら事業展開する試みを実感したひとコマであった。

『養鶏業界は国際的だぜ!!』

こんなこと、業界に入らなきゃ知る術もない。

物価の優等生の代表としてタマゴを支える舞台裏は、一般消費者の想像をはるかに超える進歩を果たしている。養鶏業界を著しく進歩させた原動力は、多くの養鶏場のトップである。その姿に農家のオヤジというイメージはない。むしろ事業家と呼ぶ方が相応しい。

筆者がニワトリの獣医師を目指した理由の一つに、会社のトップ（事業家）と接する機会が、自分の感性を高めるキッカケになるはずだと直感したことがある。中小企業（養鶏場やPPQC）ではトップに会える機会が多い。仮に大企業に進めば、自社のトップの顔をテレビで眺めるのが関の山である。

初めての海外旅行で、早くも優れた感性を持つ事業家と接する貴重なチャンスを得たことが喜びであった。優れた感性や個性に憧れる気持ちが、筆者にとって成長に必要な栄養源である。

できる限りのことを吸収しようと意気込んで、初めてアメリカ本土の大地を踏んだ。そこからアメリカ各地を視察する出張が本格的にスタートしたのだった。

筆者：㈱ピーピーキューシー
品質管理&生産管理部門長
獣医学博士／獣医師